

ゆるしてくんか!

花登 筐

ゆるしてんか！

花登筐 はな と こばこ

昭和47年4月28日 1刷

定価五三〇円

発行者 小野田政
編集者 塩田廣八
印刷 株式会社堀内印刷所
製本 田中製本印刷株式会社
発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・千代田区神田錦町三の

一五梅屋ビル(四)

大阪・北区梅田町二七(三)

乱丁・落丁本はおとりかえします

ゆるしてんか！ もくじ

隠花植物 7

混血美少女

キル・ザ・セックスアニマル

フィンガー・じいさん

知らんのです

セックス企業計画

告白的ショック法

ぜんざいと塩

はい！ 本番

プロの中のプロ

誰か満足させて

あ づ ま 女

103

後釜作戦

鉢合せの女

どないしとくれやります

ホ
ス
テ
ス
133

どかんと持つやつ

罪なおひと

おでこに銭マーク

どや！ 温泉マークへ

遺産受取人

凄^{せい}
絶^{ぜつ}
179

ケチとしぶちん

お金ならなんぼ

見当ちがい

裸の逆手一本

ケチの完全保証

百万円の世紀の対決

とるやつ・とられるやつ

ゆるしてんか！

挿画・宮田武彦

隠花植物

人間に三欲ありといって、誰もが必ず欲望を持っている。

金銭欲の塊りかたまりのような女が、いると思えば、名誉欲というのものもある。そして、三つ目は、セックス欲である。

この三欲が、総合するやつもあるし、一つの欲望さえ満たされれば、後はどうなってもいいという女もいる。

一番始末に困るのは、女性のセックス欲の激しいことである。

他のことは、どうなってもいいからこれだけはというのは、男性にとってたまったものじゃない。そんな女性を妻にもてば、相手しないと浮気をするし、相手をしていると体が保たない。

女性に詳しい男の話によると、セックス欲の強い女性は、体つきや、顔を見てわかるらしい。

大柄でも、小柄でもなく、中肉中背、いや痩せているほうが、セックス欲は、激しいという。

そして、感度なるものも、敏感で、それでいて決して一度くらいで満足しないという。

そんな女性に限って、クライマックスの言葉も、定まらないというから不思議である。

クライマックスの言葉で面白いのはある踊り子、その途中で「一、二、三、四、二、二、三、四！」と、リズムをくちざさんだというが、本当であろうか！。

かの女剣劇のスターのM子は、必ず、その前に「ごめんなすって！」と仁義を切ったともいわれるが、あり得る話である。

仁義といえば、かつて松山の道後温泉の枕芸妓で、ことが終わると、枕もとで両手をつき、「お粗末でございました」と挨拶あいさつをするので、お粗末芸妓として有名であったのは、昭和初期の実話で

ある。

かと思うと、現代では、盛んに外国語が入る風潮がある。

スチュアデスと寝たら「アテンションブリーズ」というのでおどろいたという話は、眉唾だが、若い女性の流行は「GO! GO!」であるような。

こんな決まった言葉を出すのは、セックス欲の少ない、せいぜい一、二度で満足する女性といわれている。もっとも、満足するから言葉を発するので、すさまじい女性は、絶対言葉は吐かずに、飽くなき繰り返しをするというから、恐るべき話である。

混血美少女

さて、そんな一人の女性を登場させよう。ミナト神戸の女性で、その名もミナ子といった。

まさしく、中背、そして顔は、ミナト神戸にふ

さわしき、エキゾチックなのは、混血児のせいであつた。

ミナ子は混血だが、何系か複雑である。父というのが何か国もの血が入っているからである。

なにしろ、曾祖父が、スペインで、曾祖母がイタリア、祖父が、スウェーデンで、と、そのややこしいこと、そして父親の国籍は、アメリカだそう。

ミナ子の母のほうは、純粋の日本人で、終戦後、夜の女をやっていた。そして、定石通りに、軍属の父のオンリーとなり、ミナ子が産まれたのである。

後に、軍属をやめた父は、日本が、氣に入り、商売を始めたという。

その商売たるや、なんと、夜の男だというから、似た者夫婦である。

ミナト神戸には、外人の女性が、わんさという。朝鮮動乱に出兵中の夫をもつ将校夫人や、看護婦、はたまた、戦争未亡人――。

いや、外人ばかりでなく、芦屋、六甲などの外人崇拜の有閑マダムなど――。

そんな女性達に、一夜の相手をするのが、夜の男の商売である。

そして、ミナ子の母のほうは、男相手に、これまた、一夜の春を売る。

つまり、夫婦共稼ぎである。ミナ子は、六歳にして、その両親の商売の手助けをしたというから、大変な親孝行――。

どんな手助けかというと、ボン引きなのである。巷にネオンが点ぜられると、三宮^{さんのみや}や、元町のガードの下に立ち、

「ヘイ！ ベッドフレンド欲しくない？」

そう呼びかけたというからすさまじい。十歳の頃になると、ひと目見て、この客は、なにを欲しているか、わかったというから、天才教育は、少女の頃から必要である。

男の場合は、たいいてい欲しているが、女の場合だと、欲している癖になかなかそんな顔をしない。

「なあに？ お嬢ちゃん、ベッドフレンドでなんのこと？」

見るからに、上流階級の夫人に聞かれたことがある。

「ベッドの中でのお友達要らないかって聞いているの」

「まあ！」

夫人は、顔色を変えた。

「こんな子供に、なんというハレンチな。一体、教育者はなにをしているの。あなたのママに、説教したげる！ 連れて行きなさい！」

耳を掴^{つか}られて、強引に、案内を強制され、ミナ子は、仕方がなく、仕事場兼用の、わが家のアパートの部屋へ夫人を連れて入ったら、なんと、母は男性フレンドと目下仕事中――。

夫人は、その男性を見て、ぶるぶる震えた。

「あなた！ 一銭も要らない私を拒否して、お金を出してまで、そんな不潔な女と！ なんとという不経済な！」

そんなエピソードもあるという。

ミナ子が天才教育を受けたのは、他のこともある。

父も、母も、大変な、商売熱心であつたことである。

熱心ということは、研究心旺盛ということをも意味する。

二人は、仕事がすむと、よく討論を始めるのである。

ミナ子の両親の仕事場は、アパートの部屋である。

廊下を距てた二つの向かい同士の部屋で、父が、仕事をするときは、母と、ミナ子は、向かいの部屋にいる。

二人の仕事が重なると、ミナ子は、必然的に廊下で待っている。

その間、ミナ子は客引きの仕事には出ない。もし、かち合つて、客を待たせては、いけないからである。

それに、時間をいっていても、延長する場合もある。

そろそろいいなと思う時は、父や、母は、部屋に、備えつけてあるラジオをかける。

すると、ミナ子は、客引きに出る。だが、泊まりの客というのは絶対とらない。

たいてい仕事は、午前一時に終わるが、それからは、夫婦の時間となる。

約一時間は、夫婦の討論、研究となる。例えば、

「今日の客は、あまり喜ばなかつた」
母がいうと、父は、

「どういうふうにした？」と聞く。

「こうやって、こうしたのよ」

母は、一から、やってみる。

「それで、男は、どうやった？」

「こうしたわ」

つまり、父を客と見たててやってみる。

「男の体は、どうだった？」

「こうだったわ」

そこで、父は、男から見た批判を加える。

文字で書けば、日本語だが、言葉は、すべて外国語である。

英語もあれば、イタリア、スペイン語もある。

ミナ子は、だから、各国語が、広く浅くしゃべれる。

父のほうも同じである。

「こうしたら、客は喜んだよ」

実地に、母に、してみせる。

「あら、こんなことで喜ぶなんて、よっぽと、慣れてない客ね。それで満足しちゃだめよ。ここんときは、こうよ」

このやりとりを、ミナ子は、傍でじっと聞きながら、必要なところはメモをとっている。

これが、両親のミナ子へのセックスの天才教育ともなったのであるのは、当然のことである。

ミナ子は、その両親の研究と、反省をじっと見聞きしながら、幼な心の頭に叩き込んでいたから門前の小僧、習わぬなんとかである。

両親の飽くなきセックスの研究が、ミナ子の天才教育となったことは、たしかであつたろう。

ミナ子が、初めて、セックスを知ったのは十二歳の時だったというから、いかに、その教育が徹底していたかがよくわかるう。

彼女が、十二歳の時、まだ、彼女は、ボン引きをやらされていた。

それは、俳句の季語にもあるという物憂い春の夜、春愁の宵であつた。

その日、父には、早く客がついていた。芦屋の有閑マダムで、必ず一週間に一度、神戸へ買物に来たついでに、セックスも買うという五十前の女であつた。

ところが、母の客は、なかなか捕まえられなかった。

やつとのもので捕まえたのが、六十歳くらいの老人で、かなり酔っ払っていた。

「ヘイ！ ベッドフレンド欲しくない？」

例のキャッチフレーズで、心をそるミナ子の

言葉に、

「ようし！ わしは、行ってやる！ わしは女房に、十日前に死に別れた。けどの、女房とは結婚以来、三十九年、一日も欠かしたことはない男なんやぞ！」

そう管巻くだいたから、相当な嘘つきだとミナ子は思った。

だいたい、三十九年も、一日も欠かさず奉仕をする男が、未だに生きていられるはずはない。

しかし、前金を受けとった大事なお客さまである。ところが、母の仕事部屋へ連れて帰ると、母には、客がついていた。

つまり、直接に客が、来ていたのである。

「ママ、ひどいわ。私を、どけて、じか取り引きとは！」

「そうかて、お前が、取ってこないんだもん」

母の仕事場における言葉は、無情だった。

「ねえ、おじいちゃん。ちょっと待ってよ。いま、混んでるから」

「なに！ 待てんど！ わしは三十九年間、女に待てといわれたことは一度もないんじや！ 待てというなら違約金を出せ！」

じいさんは、怒った。なにしろ両方の部屋をはさんだ廊下である。

ミナ子は覚悟を決めた。

「じゃあ、私じゃあどう？」

「お前、歳いくつじゃ？」

じいさまは、思わず聞いた。

「十五よ」

ミナ子は、三つもサバをよんだ。

「よからう。十五ならば……」

ミナ子は決心したものの使う部屋はなかった。

「屋上へ上がろう」

ミナ子は、そういいながらもやはり心は、ふるえた。

ミナ子は屋上へ上がると、その自称三十九年連続チャンピオンとミナト神戸の灯を見た。

とても、灯は、きれいだった。ミナ子とても、

やはり日本娘の血は、半分あった。

処女を破る感傷もあった。

遠くで、船の汽笛が、鳴った。

ミナ子の目には、涙があった。汽笛が鳴ると、出る涙であった。

ミナ子には、大好きなボーイフレンドがいた。

その男は、十六歳になる太郎と呼ばれる孤児であった。

もちろん、戦争孤児である。ミナ子とは、ずうっといっしょに遊んでいた幼な馴染みである。

太郎は、幼年時代靴磨きや、中華料理屋の皿洗いをしていた。

「もっと、金儲けがあるんや」

そういつて船に乗ったのは、十三歳の時である。

ギリシャの貨物船のボーイに雇われたのである。

太郎は、十四歳の春に帰って来て、ミナ子に、フランス人形をくれた。

「おれ、フランス人の娘に、惚れられたんや」

そのいいぐさに腹を立てたミナ子は、そのフランス人形の手足を、バラバラに、もぎ取って海へ捨てた。

太郎は、船に乗っていった。今度は、オランダの貨物船だった。

また、一年たつて帰った時、太郎は、マドロス服を着ていた。

「おれ、船員に可愛がってもらってるんや」太郎は、自慢をした。

そのマドロス服を着た太郎に、ミナ子は、処女を奪ってくれるなら、あんたよといったかった。

しかし、太郎は、ミナ子に、風車小屋の人形を渡すと、また、その船に乗って行ってしまつて一年たつのにまだ帰ってこない。

汽笛が鳴ると涙が出るのは、最後に行ったそのころからである。

「太郎のバカ！ あんたが、帰ってこないからよ。あんたの代わりに、酔っ払いのおじいちゃん

に私をあげるの！」

ミナ子は、また、涙を流した。

「なんで、泣いてる？」

自称、三十九年連続のじいさんは、ミナ子のをぞぎ込んだ。

「ひょっとしたら、お前、男を知らんのと違うか？」

「うん」

ミナ子は、こっくりうなずいた。太郎のことを思い浮かべて、急に捨てるには惜しくなったミナ子である。

きつと、このじいさん遠慮してくれるかも知れない——そう思ったのである。

ところがである——。じいさんは、雀躍（さつどく）して喜んだのである。

キル・ザ・セックスアニマル

三十九年間、無欠勤の記録をもつじいさんは、

男を知らないミナ子と聞いて、天にも上らんばかりの歓びであつた。

「このわいがな、口惜しいことがひとつあるのや、三十九年間、休みなしに、勤めを果たしてやった母ちゃんやけどな、嫁にもろたときは、初めてやなかった。ええ、十八で男知つとったんや、それからゆちうもんは、一回も、初めてに当たつてへん」

ミナ子は、驚いた。三十九年間、毎日、嫁を抱きながら、このじいさんは、その上に浮気しとったんやろか——。

「なんて、今晚は、うれしい晩やろ。しかも、こんな青空の下で、わいは、男を知らん無垢（むこ）の女を抱けるてなあ」

じいさんは、感激に、むせぶかのように、天を仰ぎ見た。

ミナ子は、そのじいさんを見て、こんなに喜んでくれるのなら、すっかり処女をあげてもええと思つた。